

Title	研究型大学院大学における日本語カリキュラムの開発
Author(s)	義永, 美央子; 岡, 貴子; 三牧, 陽子 他
Citation	日本語教育国際研究大会名古屋2012予稿集第2分冊. 2012, 2(B11), p. 32-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25298
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

研究型大学院大学における日本語カリキュラムの開発

三牧陽子（司会：大阪大学）

西口光一（大阪大学）

義永美央子（大阪大学）・

岡貴子（大阪大学）

1. 背景と目的

日本国内における日本語教育には、留学生 30 万人計画による留学生急増という量的拡大とともに、教育の質保証という両面が課題となっている。そのような要請に応えるべく、発表者らは研究型大学院大学において 2009 年度より独自のカリキュラムデザインとリソース開発に取り組んできた。

本パネルでは、カリキュラムデザインの実践理念およびリソース開発の実践を報告し、かつ、(1) Common European Framework of Reference (以下、CEFR) 等を参照したカリキュラム開発や教材作成等の有効性の検討、(2) 日本語環境において研究活動を行う研究留学生の特性に応じたアカデミックな日本語教育の提案、の 2 点を中心に論じる。

2. カリキュラム開発における CEFR の有効性

CEFR の各種の能力記述は、カリキュラム開発においてひじょうに有用なツールとなった。本節では、CEFR 能力記述の 6 つのレベルと 25 の言語活動を示し、新カリキュラムでどの部分をどのように扱うこととしたかを報告する。本報告を通して CEFR のカリキュラム開発に関する参照枠としての有効性を示す。

3. 基礎日本語教育

3.1 自己表現活動中心のマスターテキスト・アプローチによる基礎日本語教育

新カリキュラムの基礎日本語教育課程では、文型・文法事項積み上げ方式に代わり、自己表現活動中心のマスターテキスト・アプローチという教育方法を採用している。同教育方

法はテーマ中心の外国語教育の一形態で、自己表現活動に関わるテーマを各ユニットで設定したカリキュラムを策定し、同テーマについてのプロトタイプ的なテキスト（以下、マスターテキスト）を核として教育が行われる。文型・文法事項はそのようなテキストの中に織り込む形で提示され、そのようなテキストから言葉遣いを流用して自身の発話を構成し言語活動に従事することで日本語習得を促進するという対話原理に基づく日本語習得がデザインされた。新たな基礎日本語教育のアプローチ等については別稿(西口他 2012)に譲り、本稿では同教育方法に基づく一般留学生を対象とした基礎日本語教育の内容を概観する。

3.2 大学院研究留学生のための基礎日本語教育

研究型大学院大学では、大学院での学位取得を目指す留学生（以下、研究留学生）が大きなウエイトを占め、彼／彼女らの特性に応じた教育のデザインが必要とされる。本発表では、研究留学生を対象とした日本語集中コースにおける基礎日本語教育について報告する。このコースでは、3-1 で述べた自己表現活動中心のマスターテキスト・アプローチに基づき、大学院進学前の予備教育として、日本語未習の研究留学生に対して 15 週間の集中的な日本語学習の機会を提供している。

発表者らは、3-1 で述べた一般留学生用のマスターテキストをプロトタイプとして、研究留学生に特化したマスターテキストを開発した。そして、自己表現を中心とした種々の活動を通じて、学習者の大学コミュニティへ

の参加の促進, および, それを可能にする基礎日本語能力の獲得を目標とするコースをデザインした(義永他 2012)。これらの過程は, 自律的学習能力・自己管理能力の育成や, 専門家の卵としての自己の再確認といった, 研究留学生の全人的教育にも貢献しうるものである。

4. アカデミックな目的に特化した中級・上級日本語教育

4.1 アカデミック・オーラルコミュニケーション教育

研究留学生という学習者特性に応じ, 研究相談や研究ディスカッション等, 研究場面に特化し論理性を重視した, アカデミックな口頭スキルの養成を中心に据えたカリキュラムを開発した。

学習者の多くが研究室に参入直後で本格的な研究活動を今後開始する来日直後の研究留学生であることを背景として, 予備教育的かつ日本の研究室文化理解の観点も重視した。研究室構成員や研究室文化を自ら発見して共有し合う活動(三牧 2010)や, 今後従事する研究の一連のプロセスを辿りながら, いずれの段階においても周囲の研究環境における人的リソースとの円滑な人間関係構築を基盤としたコミュニケーションの必要性を強調した内容となっている。つまり, アカデミックな口頭コミュニケーション能力の養成とともに, 参入する環境を理解・活用できる観点の養成も同様に重視した JSP 教育である。

4.2 アカデミック・ライティング教育

学習者の文章の問題は, 文法や語彙の言語知識の不足より文章構造の不整合や論理的飛躍の方が深刻であり(村岡 2010), 特に大学院レベルでは看過できないものである。こうした問題意識から, アカデミック・ライティング(以下 AW)教育のカリキュラムを論じる。

研究に必須の批判的コメントの授受の観点から, 複数の文章を比較, 分析, 評価する協働的活動「テキスト分析タスク」を導入した教育実践を行った。本タスクは, 学習者は(1)文章評価能力がまず高まり, (2)自己の学習へ

のメタ認知能力の向上が進歩を促すという仮説(村岡他 2009)に基づき, かつ批判的読みの深化, 他者から学ぶ姿勢の強化, および推敲能力の向上を目指している。上記実践の結果と学習者への調査から, AWには言語項目に加え, 構造や展開等の広い視野の獲得, 学習へのモニターも重要であることもわかった。

以上から, AW 教育はフィードバックとしての文章評価作業, 自身の文章の修正作業をカリキュラムの中心に置き, 協働的な学習活動の可能性をより探るとともに, 学習過程を継続的に観察することが重要であると言える。

5. まとめ

留学生急増と教育の質の保証という要請に応えるべく開始した新たなカリキュラム開発においては, レベル照合や各レベルの記述にあたって CEFR を参照しつつ, 研究型大学院大学の特性に応じた記述の絞り込みを行った。基礎日本語教育段階とアカデミックな目的に特化した中級・上級段階における理念や取り組みを示したが, 実践の評価を積み重ね, さらに開発を進めることが課題である。

注: 本研究は平成 23 年度科学研究費補助金基盤研究(B)「留学生大量受け入れ時代に向けた大学における新たな日本語教育スタンダードの構築」(課題番号 21320093 研究代表者西口光一)の助成を受けた。

【参考文献】

- 三牧陽子(2010)「研究場面における対面コミュニケーション能力養成に向けて—『参入する研究コミュニティを知る』アクティビティ—」『多文化社会と留学生交流』第 14 号, 大阪大学留学生センター, pp.41-48
- 村岡貴子・因京子・仁科喜久子(2009)「専門文章作成支援方法の開発に向けて—スキーマ形成を中心に—」『専門日本語教育研究』第 11 号, pp.23-30
- 村岡貴子(2010)「専門日本語ライティング能力の養成を目的とする学習課題の捉え方」『多文化社会と留学生交流』第 14 号, 大阪大学留学生センター, pp.49-56
- 西口光一他(2011)「OUS カリキュラム開発の現在」『多文化社会と留学生交流』第 15 号, 大阪大学国際教育交流センター, pp.11-21
- 西口光一(2012)「CEFR の構造と記述文と OUS カリキュラム」『多文化社会と留学生交流』第 16 号, pp.63-72
- 西口光一・滝井未来・義永美央子・岡崎洋三(2012)「対話原理に基づく基礎日本語教育—理論と実践—」2012 年日本語教育国際大会パネルセッション
- 義永美央子・戎谷梓・村岡貴子(2012)「大学院研究留学生のための基礎日本語教材の開発—日本語研修コースにおける実践から—」『多文化社会と留学生交流』第 16 号, 大阪大学国際教育交流センター, pp.73-87